

技術化のライフサイクル

私の従事した育種領域では、品種の寿命を10年以上の期待値としている。また、一般農業技術についても、10～30年が理想的な有効定着期間ではないか。技術化2～3年の当初期間、技術化衰退期の判断対応がむずかしい。工業領域でも多分、類似した考え方があるだろうし、開発資金・営業資金の回収などが関係して、技術化のライフサイクルがきまってくる。

ところが、公的機関の場合には、予算化の対応上短期処理に追いまわされるけねんがあり、企業の場合には、この事柄以外デザインの追求から、さまざまに変わる。3年更新の対応がしばしばきかれるが、臨機な対応は別として、骨格的内容は10年目標が一応の目安になろうか。創造的な活動に焦点をあてれば、比較的長期的見通しと配慮が必要であろう。長期的構想と解放感とで画期的な発想がうまれるもので、短絡的な対応や窮屈感からは、良い結果が現われないとよくいわれる。外国との対比から、私どもは反省したらどうかと考えているが、いかなるものであろうか。

一般防除農薬や除草剤の場合にも、よく似た関係があるようにも考えている。ただ、抵抗性の逆転や耐性菌の発生への対応には3年目からといわれるが、これは臨機対応の関係になろう。この対応については、具体的な活動がよく知られているし、前にふれた流通過程の柔軟な配慮も必要側面であろう。外国旅行をした際に、「おじいさんの使っていたトラクター!!」の言葉をよくきくが、実にうらやましい。

〔財団法人 日本植物調節剤研究協会理事 北陸支部長 丸山 篤〕

目次 (第17巻第1号)

北海道における水田除草剤利用の現状と問題点……………2

＜北海道上川農業試験場 谷川晃一＞

1. はじめに……………2
2. 北海道稲作の現状と動向……………2
3. 雑草防除適期時の気象条件……………3
4. 雑草防除法の現状と問題点……………3
5. おわりに……………8

イグサの生育・収量および茎の性状に及ぼす除草剤の影響について……………8

＜広島県農試い草試 下山根義行＞

＜佐賀県農業試験場 中村大四郎＞

1. はじめに……………8
2. 試験材料および方法……………9
3. 試験結果および考察……………9
4. まとめ……………13

昭和57年畑作関係除草剤試験成績概要……………15

＜財団法人 日本植物調節剤研究協会＞

昭和57年度水稻・畑作関係生育調節剤試験成績概要……………21

＜財団法人 日本植物調節剤研究協会＞

表紙の写真：クサソテツ（コゴミ・ガンソク）の胞子葉を拡大したものである。別名コゴミとしてよく知られ、春先の栄養葉は山菜として珍重されている。